

平成 29 年 6 月 18 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24520807

研究課題名(和文) イスラーム帝国におけるハーッサに関する研究—家産帝国理論構築に向けて—

研究課題名(英文) Studies on the Khassa Institution of the Islamic Empires

研究代表者

前田 弘毅 (MAEDA, HIROTAKÉ)

首都大学東京・人文科学研究科・准教授

研究者番号：90374701

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究においては、サファヴィー朝イランにおいて王権を支えた王のゴラーム集団の活動と、ハーッサ政策との関わりに注目して研究を進めた。その結果、「外部」からの積極的な人材登用の伝統の一方で、ゴラームの出身地に由来する「境域性」を明らかにした。特に、有力ゴラームの出身地の王権と帝国権力との関わりなど、ハーッサ政策の担い手が有していたアイデンティティの重層性について明らかにした。また、境域地域間の比較やハーッサをめぐる帝国権力とマイノリティ集団の関係性についての知見も深めた。

研究成果の概要(英文)：In this research the author paid a special attention to the activities of royal ghulam corps of the Safavid empire and its khassa policy. Islamic empires were traditionally active in relying on the human resources from 'the outer world' and the Safavid royal ghulams corps were introduced from the Caucasus region. At the same time each member of the corps preserved their identity and family traditions from their homes at the frontier. The khassa policy was a key for the Safavid royal authority to create more centralized state but its executors possessed a 'frontier' identity and this influenced the imperial policy in turn on the multi level. The study also called the need to deepen the knowledge on the involvements of various ethnic groups from the Caucasus with imperial authority.

研究分野：西アジア史・ユーラシア研究

キーワード：サファヴィー朝 ハーッサ 奴隷軍人 コーカサス(カフカス) グルジア(ジョージア) 境域 王領地

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 前近代のイスラーム帝国において、ハーッサは王の個人所有物を表すタームとして用いられた。これは王の家産と国家の関係を検討し、王権の社会における影響力を考える上で、重要なタームである。

(2) サファヴィー朝イラン帝国(1501 - 1736年)では、第5代シャーで中興の祖ともされるシャー・アッパース一世の時代に、王領地(ハーッサ地)が拡大し、王直属の武人集団であるコルチとゴラーム(グラーム)軍の拡充が図られた。一般に王権の拡大や集権化政策が指摘されてきたが、詳しい分析はなされてこなかった。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、前近代イスラーム国家におけるハーッサ概念をキーワードとして、ペルシア語・グルジア語等の文献史料に照らして前近代イスラーム帝国における「王権」と「家産」の特質を検討することである。

(2) 特に、この言葉が意味する君主の「家産」の詳細、すなわちハーッサ概念に含まれたヒトとモノ(王家家産構成員とこれを物質的に支えた基盤)を具体的に検討し、その活動やあり方を明らかにすることで、前近代イスラーム王権の特質の一端を究明する。

## 3. 研究の方法

(1) 具体的には王権の手足となった「王のゴラーム(グラーム)」の集団について史料に基づいて詳しく分析を行う。特にこの集団については郷里(グルジアなどコーカサス)から移動した来た側面がある。サファヴィー朝史の中心史料であるペルシア語史料の他、グルジア語史料など、これまであまり用いられてこなかった史料にも注目してその王権の担い手としての活動について詳しく調べる。

(2) 史料の活用についても20世紀末に発見された『歴史の精華』第三巻の情報に注目する。行政便覧、家産を支えた物質的基盤について、特に従来の研究で用いられてきた中央宮廷の史料だけではなく、ケルマーン、シューシュタル、アゼルバイジャン・コーカサスなどの地方情勢に詳しい史料の記述に注目する。個別の史料の特徴にも注目する。「王のゴラーム」による地方統治の特徴や、「王領地」の位置づけなど、国制史上の課題にも検討を加える。

(3) この他、理論的にはイスラーム世界の他王朝や、同時代の他地域の王権と、その担い手について、比較史の視座からの考察を加える。サファヴィー朝イラン帝国のハーッサ地、すなわち王領地の実態について史料に基づいて具体的に検討する。また、史料中に散

見される人間集団の「ハーッサ」の問題を手がかりに、より詳しく周辺史料や地理的な把握、時代環境など総合的な観点からアプローチすることで、「王の奴隷」概念の再検討を行う。すなわち支配者の家産の「担い手」を明らかにする作業である。王の「家産」と支配エリートとの関係についてより具体的に踏み込んだ考察を行う。先行研究の把握、王領地を通じた土地支配の実態、マイノリティと辺境地域への政策も含めた国王家産共同体構成員のリクルートの問題について検討した上で、ハーッサ概念の先行研究における理解ハーッサとなった「ヒト」についての検討、ハーッサとなった「モノ」、当時のサファヴィー朝社会におけるハーッサの示す空間的「奥行き」を具体的に検証することで、サファヴィー王権がイラン社会で有した「王権」としての範囲を具体的に示す。

## 4. 研究成果

(1) ハーッセ政策を支えた「王のゴラーム(グラーム、奴隷)」集団について、単なる王権の手足としてではなく、人の移動の観点からその歴史の再構築に努めた。まず、「一族史」としての再構築である。シャーに仕えたグルジア出身の「王のゴラーム」について、個別の豪族史としての再構築と人の移動の視点からの考察を行った。

特に15世紀にグルジア(ジョージア)南部で台頭したバラタシュヴィリー族について研究を進めた。グルジア王家と婚姻関係を結ぶことで勢力を拡大したバラタシュヴィリー族は度重なるトルコマン勢力の侵入により南部地域が荒廃するなかでも地位を固め、サファヴィー朝勃興時には最大豪族の一つであった。

シャー・タフマースプとアッパースによる侵攻によって、一族は分裂するが、アッパースの宮廷で王のゴラームとして仕えたオタル4兄弟(ないし3兄弟)はサファヴィー帝国内部での有力武人として活躍した。さらに地方統治者としてカンダハール、シューシュタル、ケルマーンなど各地で統治者として活動した。さらにオタルの庇護を受け、その後グルジアに帰還したカプランは17世紀後半には東グルジアで最大の豪族勢力を築いた。

こうしたバラタシュヴィリー族のオデッセイともいべき活動についてグルジアの学会で重ねて発表を行ったほか、スペインの国際セミナーに招待されて報告した。

さらに、南北コーカサスの歴史をつなぐものとしてシャー・アッパースのグルジア遠征の最中に敢行されたオセチア遠征について現地の学会で発表した。ペルシア語史料による記述の違いをとりあげ、遠征のタイミングや経路などについて議論を行った。

このように、地域をまたいだ武人・統治エリートを輩出したグルジア系武人について郷里との関係にスポットライトをあてることで家産帝国の内情について考察を加えた。

(2) 諸文明圏の境域としての「王のゴラーム」の出身地たるコーカサスの特徴と王権との結びつきにも注目した。サファヴィー朝に限らず、コーカサス出身者を王権の担い手として重用するシステムは、19世紀まで継続したが、これは境域出身者の多言語に通じる能力や出身地の政治動向と、「外部」から登用した人材を積極的に活用するイスラーム王権の伝統に則ったものであった。

一方で、サファヴィー朝の王権はいわばリクルート先のグルジアなどコーカサス地域権力の内情にも通じていたし、一方で、こうした地域権力は巨大な帝国権力の狭間で時にはその宮廷内部にも深く入り込みながら、巧みにそれを利用しようとした。ハーッサという「王権」の象徴には、それを帯びた人びとの地域性も又マーカーとして作用していたのである。

いわば帝国君主の「家産」体制のなかに組み込まれていたコーカサス出身者の「境域性」について詳しく考察した。また、諸文明圏の狭間に位置するコーカサスという磁場について理解を深めるなかで、地政学の視点をふんだんに盛り込んだアメリカの学者の環黒海地域に関する書物を共同で翻訳し、イラン・コーカサスだけでなくより広域的な地域理解に努めた。

(3) 「元キリスト教徒」という事情から、サファヴィー朝を訪れたヨーロッパ人は多くの記述を「王のゴラーム」やシャーの属民となったグルジア人・アルメニア人について残した。その中でも、アッパースの時代に特にキリスト教徒マイノリティと深い関係を有したイタリア人ピエトロ・デッラ・ヴァッレの旅行記について複数言語による翻訳なども海外調査等を通じて精読することで、当時のイラン社会における王権と宗教マイノリティの関係についても知見を得た上で、論文を執筆した。

こうした文明間・宗教間交流には、16-17世紀の大きな時代的変化が影響しており、サファヴィー朝のハーッサ政策と「家産帝国化」にも大きな影響を与えている。近年大きく変化しつつあるオスマン帝国史研究について知見を深めた上で、比較史的展望をより意識できたことは大きな成果である。特に Tezcan, Dursteler らの最新著作からさかのぼって、先行研究についても知見を増すことができた。

(4) 研究者ネットワークの構築も本研究の成果としてあげることができる。ほぼ年に2回以上、国際学会での報告を行った。特に「王のゴラーム」を輩出したグルジアにおいて英語とグルジア語で毎年報告を行い、現地との意見交換に努めた。トルコ東部のグルジア関連史跡を訪問した。国際学会ではセ

ッションのチェアも勤めたが、グルジアと隣接諸帝国権力の関連について、多くの知見を得た。さらに、欧米においても、エール大学とアリカンテ大学からの招待発表を行う機会を得た。前近代イスラーム王権をめぐる地域間比較の視点から得た考察は研究成果に含まれている。さらに、アルメニアとグルジアから日本に招へいされた中世史研究者との研究交流を通じて、日本の王権論も含めた議論の可能性も認識した。

本研究ではカバーしなければならない分野や地域も広く、多くの課題が残されたことも事実である。とりわり、中央宮廷の史料だけではなく、ケルマーン、シューシュタル、アゼルバイジャン・コーカサスなどの地方情勢に詳しい史料の記述に注目することを見込んだ。ただし、この点については時間的な制約もあり、十分踏み込んで考察できなかった。そのため、全体像について未だ明らかに出来なかった点も多々残った。もっとも、イランで出版された有力ゴラーム家系の子孫の文書集などを入手し、今後研究を深化させる上で一定の成果を得た。以上のように、実証面でも理論の面でも、サファヴィー朝におけるハーッサ政策と王権論について、その主たる担い手であった王のゴラーム軍団研究を通じて理解を深めることが出来た。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

前田弘毅「ピエトロ・デッラ・ヴァッレの旅 17世紀イタリア人貴族の見た「イラン社会」」『Ex Oriente, vol.21 (2014), pp. 33-60. (査読無)

前田弘毅「フロンティアから、そして、またフロンティアへ サファヴィー朝支配下のグルジアの経験から」『歴史学研究』925 (2014), pp. 165-173. (査読有)

[学会発表](計10件)

Hirotake Maeda, "Men of transformative: Caucasian converts at the Safavid court in the era of early-modern globalization", *International Seminar The Other Europe: Eastern Europeans and Safavid Communities in Spain and Its Wider World. The State of the Art and Lines of Research*, University of Alicante, 10-11 November 2016, Alicante (Spain).

Hirotake Maeda, "Baratashvilis' Activities in the Safavid Empire and its Historical Meanings" *7th International Symposium on Kartvelian Studies*, Tbilisi

State University, 20 October 2016, Tbilisi (Georgia).

Hirotake Maeda, "Giorgi Saakadze's Revolt in 1625 and an Iranian Bureaucrat's Perception", *The First International Kartvelological Congress*, Georgian Academy of Sciences, 11 November 2015, Tbilisi (Georgia),

Hirotake Maeda, "Fresh Recruits from the Caucasus serving the "Persianate Empires", Panel 3: The "Other" in the Persianate World, *The Persianate World: A Conceptual Inquiry*, May 9 - 11, 2014, Luce Hall, Yale University (United States of America).

Hirotake Maeda, "New Information on Giorgi Saakadze's Revolt from Fazli Khuzani's Persian Chronicle", 2<sup>nd</sup> International Symposium Georgian Manuscripts, Lecture-hall, Georgian National Museum, June 28, 2013, Tbilisi (Georgia).

〔図書〕(計7件)

Hirotake Maeda, "Transcending Boundaries: When the Mamluk Legacy Meets a Family of Armeno-Georgian Interpreters", Michael A. Reynolds (ed.), *Constellations of the Caucasus: Empires, Peoples, and Faiths*, Princeton: Markus Wiener Publishing Inc, 2016, 154 (63-85).

Hirotake Maeda, "New Information on the History of the Caucasus in the Third Volume of Afzal al-tavarikh", *Studies on Iran and The Caucasus: In Honour of Garnik Asatrian*, Uwe Bläsing, Victoria Arakelova and Matthias Weinreich (eds), Leiden: Brill, 2015, 691 (107-114).

Hirotake Maeda, "Exploitation of the Frontier: The Caucasus Policy of Shah 'Abbas I," Willem Floor and Edmund Herzig (eds.), *Iran and the World in the Safavid Age*, London: I. B. Tauris (International Library of Iranian Studies), 2012, 506 (471-489).

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

前田 弘毅 (MAEDA, Hirotake)

首都大学東京・人文科学研究科・准教授

研究者番号：9 0 3 7 4 7 0 1